

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月11日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720196

研究課題名（和文） 第二言語語彙習得におけるTAP理論とATIを融合した新たな理論展開

研究課題名（英文） Toward a new approach to L2 vocabulary learning: Combining Transfer Appropriate Processing Theory and Aptitude Treatment Interaction.

研究代表者

田頭 憲二 (TAGASHIRA KENJI)

広島大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：00403519

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本人英語学習者に対する語彙教授法の効果を、より詳細に明らかとすることを目標とする。その際、日本人英語学習者を動機づけ、学習方略等により分類を行い、どのような学習者のタイプには、どのような教授法が最も効果的であるのかを検証する。その結果、学習者は学習課題に応じた語彙学習の方略を適応し、また、その語彙学習方略の選択により、学習される語彙知識の側面が異なることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The influence of L2 vocabulary instruction for Japanese EFL learners was examined in a series of studies. The data were analyzed from the perspective of learners' vocabulary learning strategies profiles in order to see how the profile change during the vocabulary learning process and how the profile influences the aspects of L2 vocabulary knowledge.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語，教育学，語彙習得

1. 研究開始当初の背景

1980年代より、第二言語習得における語彙研究分野にて、様々な教授法の効果に関する多くの報告がなされてきた。しかし、これらの先行研究結果から数多くの英語教育に対する知見が得られているが、幾つかの問題点が挙げられる。

問題点1：多くの研究が未だ「記述的な研究」のため、どの教授法が効果的であると思わ

れるのかという記述に留まり、結果に対する説明的、または分析的な観点を欠いた状態であること。

問題点2：効果の測定を「保持率」という側面においてのみ行っており、その語の処理の自動化に関する「反応時間」を用いた測定をする必要があること。

問題点3：現在まで、学習者の習熟度を要因

配置することで実験が行われているが、他の学習者要因（動機づけ、学習方略）と教授法の効果の「適性処遇相互作用（Aptitude Treatment Interaction:ATI）」を調査した研究は未だ少ないこと（Tseng & Schmitt, 2008）。

言語教授場面において語彙指導を効果的に行うためにも、理論的な基盤に基づいた教授法の効果を調査することが重要である。また、その際、それらの教授法が、語彙習得の最終段階である「自動化された語彙能力」の育成にどの程度寄与するのか、または寄与しないのかということ、更には、もし寄与するのであればどのような学習者に最も効果的であるのかという教育的な情報を得るための教授介入による実践が必要となる。

2. 研究の目的

本研究においては「日本人英語学習者に対する語彙教授法の効果」をより詳細に明らかとすることを目標とする。日本人英語学習者を動機づけ、学習方略により分類を行い、どのような学習者のタイプには、どのような教授法が最も効果的であるのかを検証する。

そのため、第1に、学習者の用いる語彙学習方略を明らかとし、学習課題に応じた語彙学習の方略を適応するのかを明らかとする（目的1）その後、日本人EFL学習者の語彙学習方略と、語彙知識の側面の関係について明らかとすることを目的とする（目的2）。

目的1：日本人EFL学習者における語彙学習方略の変容（調査1および調査2）

現在までの研究から、学業成績が高く、または学習達成度の高い学習者ほど、語彙学習方略の使用頻度が高く（Lawson & Hogben, 1996）、より多様な方略を使用し（Ahmed, 1989）、他の方略とともに（Kojic-Sabo & Lightbown, 1999）、より体系的に（Sanoui, 1995）語彙学習方略を使用していることが明らかとなっている。しかし、以下の点については、未だ明らかになっていない。

- ・学習者は学習課題を与えられた場合、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させるのか（調査1）
- ・学習者は、与えられた課題に応じて、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させるのか（調査2）

目的2：日本人EFL学習者の語彙学習方略と、語彙知識の側面の関係（実験1および実験2）

Barcroft (2004) により、記憶成績は符号化と処理の際における認知的処理種類の一致の度合いにより異なると主張する転移適切性処理理論（Transfer Appropriate Processing Theory: TAP）を、語彙の教授法に応用した仮説の構築が試みられている。しかし、これらの仮説においては、学習者の適性は考慮に入れておらず、また、効果の測定においても、保持率を用いて検証を行っている。そこで、心理学の「転移適切性処理理論（Morris, Bransford & Franks, 1977）」の援用を行うことで仮説を設定することにより、適性の異なる日本人英語学習者を対象として、保持率とともに、反応時間を用いて教授法の効果測定を行う。

- ・ある語彙学習課題を遂行する際に、学習者が用いる語彙学習方略の違いによって、学習された語彙知識の側面に違いが見られるのか（実験1および実験2）

3. 研究の方法

目的1：日本人EFL学習者における語彙学習方略の変容（調査1および調査2）

調査1（学習者は学習課題を与えられた場合、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させるのか）

調査協力者：日本人英語学習者大学生（66名、TOEICスコア、 $M=414.62$, $SD=71.36$ ）

質問紙：以下の2つの質問紙を使用（語彙学習方略、前田・田頭・三浦, 2001）および動機づけ（自己決定理論（Deci and Ryan, 1985）に基づいた廣森, 2006））

手続き：質問紙調査（Time1）を実施後、16回の英語授業後、再度、質問紙調査を実施（Time2）

学習課題：4種類の語彙リスト（50語ペア）

結果：全体の結果を以下の表1に示す。その後、階層的クラスタ分析（平方ユークリッド距離を用いたウォード法）を用いて、学習者を語彙学習方略および動機づけに基づいて分類した結果、3つのクラスタに分類された（図1）。その結果、第1クラスタ（習熟度低、語彙学習方略使用頻度低）においてのみ、時期による差が見られた（Time: $F(1, 16) = 9.80$, $p = .01$, $\eta^2 = .37$ ）。

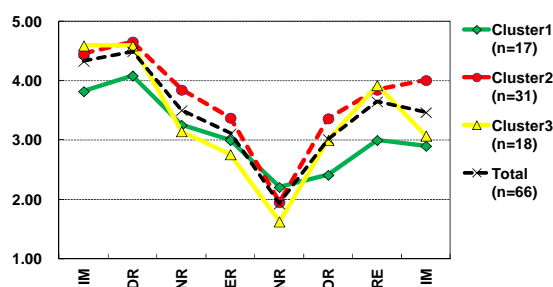
表1 Means, standard deviations, and correlations between the two phase (N=66)

	M	SD	Two phases of VLSs					
			1	2	3	4	5	6
TIME 1								
1. OR	3.02	0.73	-					
2. RE	3.65	0.78	0.24	-				
3. IM	3.47	0.83	0.30**	0.10	-			
TIME 2								
4. OR	2.98	0.80	0.81**	-0.04	0.28*	-		
5. RE	3.74	0.78	0.20	0.62**	0.07	-0.05	-	
6. IM	3.64	0.78	0.32**	-0.22	0.55**	0.14	0.02	-

NOTE: Vocabulary Learning Strategies are abbreviated as follows: OR= Organization strategy, RE = Repetition strategy, IM = Imaging strategy.

Time of Survey: Time 1 = April; Time 2 = November

a *p<.05, **p<.01



NOTE: Motivations are abbreviated as follows: IM = Intrinsic motivation, IDR = Identified regulation, INR = Introjected regulation, ER = External regulation, and NR = Non-regulation

図1 Plot of means for three-cluster solution (Motivation and VLSs)

調査2 (学習者は、与えられた課題に応じて、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させるのか)

調査協力者：調査1に協力をした66名

質問紙：調査1と同一の語彙学習方略質問紙

手続き：異なった学習課題(同意語学習)を与えた後、2回の英語授業を実施、質問紙調査(Time3)を行った。

結果：全てのクラスタにおいて、使用する語彙学習方略に違いが見られた (ps <.05)。

表2 Means and standard deviations for achievement scores for 3 groups of vocabulary learning strategies profile

		Cluster 1 (n=17)		Cluster 2 (n=31)		Cluster 3 (n=18)		TOTAL (n=66)		
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
TOEIC	Time 1	397.65	66.24	408.71	81.92	440.83	49.15	414.62	71.36	
	Time 2	422.65	59.11	435.32	76.58	453.67	56.20	437.06	67.27	
VLS	TIME 1	EL	2.41	0.61	3.37	0.65	3.00	0.59	3.02	0.73
		RE	3.00	0.81	3.85	0.65	3.93	0.60	3.65	0.78
		IM	2.90	0.81	4.01	0.55	3.07	0.68	3.47	0.83
	TIME 2	EL	2.65	0.64	3.28	0.85	2.81	0.67	2.99	0.80
		RE	3.29	0.73	3.86	0.75	3.94	0.77	3.74	0.79
		IM	3.49	0.61	3.92	0.75	3.30	0.85	3.64	0.79
TIME 3	EL	2.22	0.42	2.87	0.62	2.21	0.70	2.52	0.68	
	RE	3.37	0.96	3.62	0.80	3.78	0.91	3.60	0.87	
	IM	3.63	0.70	4.29	0.58	3.56	0.79	3.92	0.75	
QUIZ	Time 1-2	15.72	3.03	15.48	2.84	16.13	2.37	15.72	2.74	
	Time 2-3	10.53	4.72	11.24	4.58	11.86	4.61	11.23	4.58	

目的1の結果：

日本人 EFL 学習者は、学習課題を与えられた場合、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させ(調査1)、また、与えられた課題の種類に応じて、自らの語彙学習方略使用および選択を変化させることが明らかとなった(調査2)。

目的2：日本人英語学習者における語彙学習方略使用の違いがもたらす語彙知識への影響(実験1および実験2)

実験1(日本人EFL学習者の語彙学習方略と、語彙知識の側面の関係について明らかとする)

実験協力者：日本人英語学習者大学生(48名、TOEICスコア、M=747.71, SD=127.82)

実験項目：全ての実験協力者にとって未知語(19語の名詞、オランダ語)

手続き：個別実験を行った。その際、学習段階においては、対連合学習を行った後、翻訳再任課題を用いて、学習成果が測られた。

質問紙：語彙学習方略(前田・田頭・三浦, 2001)

使用された課題：翻訳再任課題(translation recognition task)(De Groot, 1992)(図3)

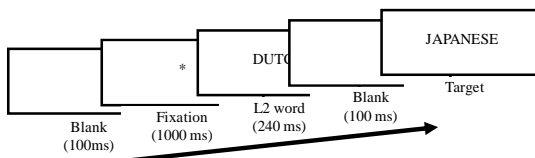
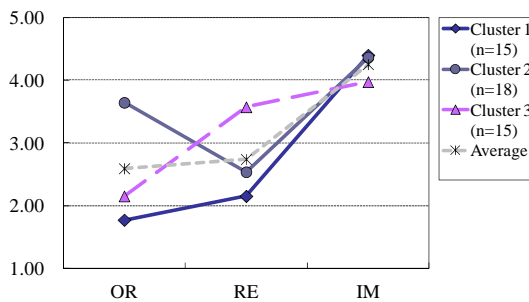


図3 刺激の呈示順序(翻訳再認課題)

結果：階層的クラスタ分析(平方ユークリッド距離を用いたウォード法)を用いて、学習者を語彙学習方略に基づいて分類した結果、3つのクラスタに分類された(図4)。



NOTE: Vocabulary Learning Strategies are abbreviated as follows: OR= Organization strategy, RE = Repetition strategy, IM = Imaging strategy.

図4 クラスタ分析を用いた語彙学習方略による学習者の分類

表3 翻訳再認課題における平均反応時間 (RT; in milliseconds) 及び誤答率 (%E; in percentages) (N = 48)

	n	RT				%E			
		M	SD	Min	Max	M	SD	Min	Max
Cluster 1	15	794	160	489	1151	11.60	11.15	0	33
Cluster 2	18	804	192	527	1212	14.83	15.24	0	50
Cluster 3	15	820	139	584	1032	9.00	11.65	0	38
TOTAL	48	806	164	489	1212	12.00	12.94	0	50

結果、全体的に、実験協力者の翻訳再認課題における課題成績 (RT 806 ms, %E 12%) は良く、また、学習者の語彙学習方略の違いにより、課題成績 (平均反応時間および誤答率) に違いは見られない。

実験2 (日本人 EFL 学習者の語彙学習方略と、語彙知識の側面の関係について、異なった課題を用いて明らかとする)

実験協力者: 日本人英語学習者大学生 (31 名, TOEIC スコア, M=750.20, SD=142.81)

実験項目: 実験1において用いられた未知語 (19 語の名詞, オランダ語)

手続き: 個別実験を行った。その際、学習段階においては、対連合学習を行った後、翻訳再認課題を用いて学習の確認を行い、その後、絵画課題を用いて学習成果が測られた。

質問紙: 語彙学習方略 (前田・田頭・三浦, 2001)

使用された課題: 絵画翻訳再認課題 (図5)

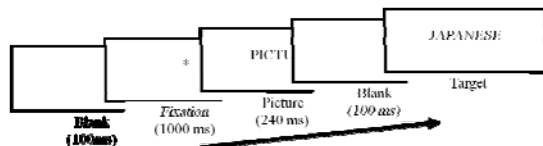


図5 刺激の呈示順序 (絵画翻訳再認課題)

結果: 階層的クラスタ分析 (平方ユークリッド距離を用いたワード法) を用いて、学習者を語彙学習方略に基づいて分類した結果、4つのクラスタに分類された (図6)。

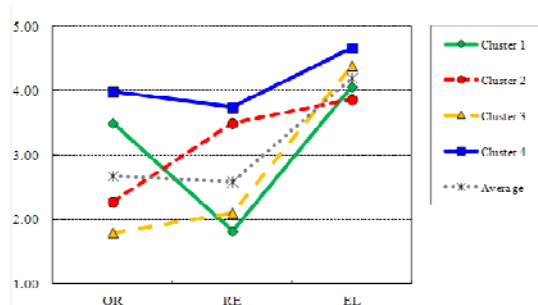


図6 クラスタ分析を用いた語彙学習方略による学習者の分類

結果、学習者の語彙学習方略の違いにより、課題成績 (平均反応時間および誤答率) に違いが見られることが明らかとなった。特に、学習段階において、語彙の意味的側面に注意配分を行った群 (Cluster4) において、その干渉が見られた。

4. 研究成果

現在まで、第二言語の語彙研究では、最も効果的な教授法は何かを明らかとすることが目的とされてきた。しかし、多くの場合、その結果についての理論的な裏づけがないままに、教授法の比較が繰り返されてきた。

また、現在までのアプローチは、実際の教授場面とはかけ離れた検証であり、より実際の教授場面へ近づけるために、学習者の適性、処理の自動化の程度を分析に組み込む必要があった。

そこで、本研究では、転移適切性処理理論を基に適性処遇交互作用を考慮し、保持率とともに反応時間の測定を行うことにより、より詳細な語彙教授法の効果比較を行うことで、実際の教授場面で応用を行うことを目的とした。

このことにより、より詳細な効果の検証結果を基にした実際の語彙教授・学習、そして学習者自身の語彙学習に対する助言の検討が、今後、可能となり、適性の異なる日本人英語学習者を対象として、保持率とともに、反応時間を用いて教授法の効果測定を行うことで、様々な日本人英語学習者に最も適し、更には効果的な教授法を解明することにより、日本の英語教育における具体的な語彙指導のための学術的な基礎研究として、また教育実践に資する貴重な資料の提供を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. Tagashira Kenji, Kida Shusaku, Hoshino Yuko, 4. Hot or gelid? The influence of L1 translation familiarity on the interference effects in foreign language vocabulary learning, *System: An International Journal of Educational Technology and Applied Linguistics*. 38号, 査読有, 2010, pp. 412-421.

2. Kida Shusaku, Tagashira Kenji, Effects of semantic processing in incidental new L2 vocabulary learning during reading: A test of the "type of processing-resource allocation" model, *International Journal of Curriculum Development and Practice*. 12巻1号, 査読有, 2010, pp. 25-35.

〔学会発表〕(計2件)

1. 田頭憲二, 日本人英語学習者における語彙学習方略の違いがもたらす語彙知識への影響, 大学英語教育学会英語語彙研究会第8回研究大会, 2011年12月10日, 麗澤大学
2. 田頭憲二, 日本人 EFL 学習者における語彙学習方略の変容, 大学英語教育学会 英語語彙研究会 第7回研究大会 (語彙研究フォーラム 2010, 2010年12月11日, 早稲田大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田頭 憲二 (TAGASHIRA KENJI)

広島大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号: 00403519

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし